

題目 社会的分配と不確実性：Eye-trackerによる情報探索過程

氏名 小谷侑輝

指導教官 亀田達也

「ウォール街を占拠せよ」。2011年このスローガンを掲げてウォール街に端を発した反格差デモは、米国にとどまらず世界中に広がった。このように人々が不公平な所得分配に敏感であることは古くから言及されている(Adams, 1965; Fehr & Schmidt, 1999)。一方で人々は社会的分配に関して、社会全体の富の総量も勘案することが知られており(Engelmann & Strobel, 2004)、しばしばこれら2つの次元は対立する。それではどのような分配が最も正義に適っていると言えるのだろうか。

政治哲学者のRawlsは、自分がどんな素性で生まれ落ちるかを知らない生まれる前の状況「無知のヴェール」を想定した思考実験を行うことで正義の原理を探った。当該状況においては、もしかすると自分は非常に悲惨な状況下に生まれるかもしれない。そこで人々は、自分が最も不遇な立場に生れ落ちたとしても生きていける社会を望むはずだとRawlsは考えた。こうした思考実験を受けて、最も不遇な人の利益を最大化する選択肢(マキシミン型社会)が選択されるべきとする主張が行われた(Rawls, 1971)。こうした主張は、現代正義論の中核をなす議論であると考えられている。

Rawlsの議論の特徴は、「最も不遇な他者の立場になって考える」ということが、思考実験の中では「自分が最も不遇な立場になったときのことを考える」ということに変換されているところにある。例えば、平均年収は低い及格差の小さい社会と、平均年収は高い及格差の大きい社会のうちどちらを選ぶかを「無知のヴェール」のもとで決めるとする。するとこれは得られる金額の期待値は大きい当たったときとはずれたときの差(分散)も大きいギャンブルと、得られる金額の期待値は小さいが、当たったときとはずれたときの差も小さいギャンブルのうちどちらを選ぶかという問題と同じになる。すなわち「無知のヴェール」のもとでは、分配に関する選好とリスクに関する選好との間に連動が生じる。この変換によって仮に自己利益のみを追求する主体が社会の構成員として想定された場合であっても、不遇な人に配慮した社会を正当化することが可能となる。

Rawlsの思考実験においては、「無知のヴェール」というものが外的に強制されることでリスク選好と分配選好の連動が生じ、マキシミン型社会が正義に合うという結論が導かれた。しかし外的な強制は、誰がどのようにして強制するのかなどの問題を生じうる。もし「無知のヴェール」に基づく議論が規範論上の思考実験を超え心理的基盤を有するのであれば、すなわちリスク選好と分配選好との連動が自生的に生じるのであれば

この問題は解決可能である。そこで「無知のヴェール」のない状況において、人々のリスク選好が分配選好と連動するのかどうかを実証的に検討することを目的として行動・認知実験を行った。

参加者は、自分のみの取り分を決めるギャンブル（リスク）課題、3人の他者のために分配選択肢を選ぶ第三者課題の2課題を行った。ギャンブル課題では、1/3の確率でそれぞれある金額が当たるくじについて3通りのくじが提示され、好きなくじが選択された。それらのくじは、当たる金額の総額が最も大きいもの（総額選択肢）、当たる金額の分散が最も小さいもの（ジニ選択肢）、当たる金額のなかの最小額が最も大きいもの（マキシミン選択肢）、という性質をそれぞれ持っていた。第三者分配課題では3人の他者へのお金の分け方について3通りの選択肢が提示された。それらはそれぞれ、3人の総額が最も大きいもの（総額選択肢）、3人の格差が最も小さいもの（ジニ選択肢）、3人のなかの最小額が最も大きいもの（マキシミン選択肢）、という性質を持っていた。分析の対象となる項目として参加者の選択行動だけでなく、Eye-trackerを用いることで課題に取り組む過程における情報探索および瞳孔サイズを指標とする生理的喚起も調べられた。

その結果、最も恵まれない他者の利得をできるだけ改善する分配を多く選ぶ個人は、自身の最悪の状況をできるだけ改善するギャンブルを多く選ぶという分配選好とリスク選好の連動が見られた。また各課題間の情報探索パターンや生理的喚起についても同様に連動が見られた。これらの結果は、ロールズの「分配の正義」の理論と人々の実際の行動選択や情報探索パターンが対応関係にあることを意味しており、正義が心理・行動的基盤を持つことを示唆する。